又一通りの難行苦行ではない。

登り登ると、下から小さく見えた火の光が段々大きくなつて、果てはそれを、家の中の焚火と見定められるやうになつた、振向いて遙の下を見降すと、雪の上の火は廣く散らばつて、人々も動き始めた樣子である、もう馬が雪車へ乘つたと見える。

何時しか、藁で圍つた小さい家に突當つて路が盡きた。

『さアお前樣、遠慮しずに入つて下つせえ』と、老人は雪履を無雜作に脱棄てた。

此方は丁寧に草鞋を脱いで、土間の隅へ揃へて置き、圍爐裡の傍へにぢり上がつた。

古木の根株を干したのを二塊置いて、其間から、弱いながらも急に斷えない焰を、椎の實形に三筋立てゝ居る。

家の中は荒莚を敷いた此一間だけで、隅の方に新聞紙を貼つた枕屏風を取廻し、婆さんが寢て居るが、不精に構へて起て來ない。

『爺樣歸つたけえ』

『むゝ、何かと思つたら、馬が倒れて居たゞア』

『さうけえ、一緒に來たのア誰でえ』

『知らねえ人だアよ』

『さうけえ』

それつきり婆さんは寢て仕舞ふ、自分は其無頓着さ加減に驚いた。

老人は入口を締める、これでもう、此家の火の光は外から見えないのである。

『御前樣、寢べえぢやアねえか、敷く物一枚掛ける物一枚しかね

えだから、御前様へは掛ける方を遣るべえ、此火は朝迄あるだァから、圍爐裡の傍へ寢たら、大して寒い事も無かんべえ』と、石のやうに重たい蒲團を、どたりと投げ出す。

『有難う、結構です、飛んだ御厄介になつて、眞誠に濟みませんですねえ』

『何の濟まねえ事があるもんけえ、さア寢さつせえ、もう一番鷄に近かんべえ』

老人と自分とは、圍爐裡を隔てゝ横に並んだ、婆あんと一緒に寢ないのは、何も自分の手前遠慮したのでなどはなく、平生斯うした習慣らしい。

風は死んだやうに靜まつて、夜明に近い空氣が虛空に花を結ぶ樣子である、めり〳〵と柱の干割れる音がする、ぱち〳〵と藁の

節のはじける音がする、戸外はどんなに寒いだらう、けれども榾の火に身體を向け、重たい蒲團をかぶつて、荒莚の上に汚ない東山を形造つて居る自分は、たゞ氣持のいゝ溫味を覺えるだけである。

家の後で强い羽ばたきが起つて、軈て沈痛悲壯の鷄鳴が聞こえた、遙の下の馬が倒れて居る所を胸に描くと、身は高い木の頂邊へも寢て居るやうな氣がして、急に危い感じが起る。

睡くなる、鷄が又一聲鳴く、醉興の旅行もこれで底をたゝいた、思つた以上に得る所があつた、けれども、こんな事は一生涯に再びすべきではないなどゝ思つて居る中に、何時しか寢込で仕舞つた。

其八　甦りて後の予

奇蹟のやうに、死ぬべき生命を助かつた自分は、秋田に居ること三月ばかりで再び東京へ出たが、素志の如く支那に赴いて、或る事を謀るに至る迄の準備中、暫く頭角を收めて新聞社の厄介になつたのが、抑も文筆累を爲すの始まりで、其後退いて著述を事とするに至り、益々自縄自縛の歴史を多く造らなければならなくなつた、斯くて、交る所多く逆流破格の奇人變物で、世の所謂文士の交際を喜ばず、成るべく文士らしからぬ生活を取るやうにして居ても、斷えず計畫しつゝある事皆畫餅に歸するのみなので、今に至る迄なほ文士生活の範圍を脱することが出來ないのは、谷中の全生庵に睡らるゝ故荒尾先生の靈に對しても、又、以前に比

べて逆境に居り乍ら、依然として自分に好意を保たるゝ小西氏に對しても、實に面目無い次第である、けれども、自分はいさゝか期する所があるので、なほ飽迄も、一面拙劣なる文士として、瓦礫の小著を彌が上に連發しながら、他の一面に於ては、斷えず人知れず何かの目論見をなしつゝ、而も斷えず失敗を重ぬるの人たらんとするのである。

で、前に述べ來つた所を總括し、併せて此書を著はすに至つた動機を明かにすべく、那須嶽で赤石徹氏に逢つたことを叙し、以て此書に結尾を與へやう。

嗚呼、顧みれば、甦つて後の自分は餘りに多く睡を貪り過ぎて居るのである、自分は甦つた上更に覺めなければならぬ。

其九　噴火と人

『雨が晴れた、出掛けよう』

那須温泉小松屋別館の三階、裏手に向いた椽側の欄干に身を倚せて、唐突に斯う口を切つたのは、三日前から滞在して居る自分である。

『もう遅う御座いますから明日になさいまし』、これは、盆飯の膳を下げに來た下女。

自分は一寸懐中時計を見たが

『丁度一時だ、これから噴火口迄は二里しかないさうだから、緩り歩いたつて、日の暮ない中に歸つて來られる』と云ひ放して、自分の座敷へ入り、宿屋の貸褞袍を脱ぐと、下は鼠ッぽいセルの

單衣に、兵子帶をきりゝと締めて居るのである。

早速、足を投げ出して、足袋を突掛ける。

悠長な下女は、膳を持つた儘棒のやうに突立つて何時迄も椽側を立去らずに、自分が急いで身仕度する有樣を、呆れ顔で見て居たが

『御客さん、御一人で被赴いますか』と、覺束なく思ふやうな問き方をする。

『結局は一人でも構はないけれども、隣室の仁と約束してるんだから、兎に角誘つて見やう』、自分は一向そんな事を苦にしないのである。

すると、隣室の障子がからりと開いて、矢張貸褞袍を着込んだ青黑い弱さうな男がひよろ〳〵と出て來た。

『これから噴火口へ被赴るんですか』と、目を圓くしての訊ね。

『えゝ、行つて來ませう、貴下ば如何です』

『もう時間が遲いぢやアありませんか、此土地でさへ三千尺も海面より高いつて云ふのに、噴火口迄は、これから更に、二里の急な道を登らなけれアならないさうですよ、それに、案内者が無けれア、十分に噴火口は見られないつて云ひます、ですから、天氣の好い日を見て、案内者を慾つて朝早くから行くことにしませう』、同行することを拒むばかりでなく、寧そ自分の無謀を戒めるやうな口氣である。

『さうなさいまし、夫が宜しう御座いますよ』、下女は加勢を得たりと調子附く。

自分は、足袋のこはせを掛け了つて、矗然と立ち上つた。

『此地へ來てから、今日で四日になりますが、朝は何時も霧が深くつて、まだ、からりと晴れ上つたのを見ません、ですから、朝からの天氣なんかを待つてちやア、幾日滯在しなければならないか、果しが附きませんよ、なアに、いくら登りが急だつたつて、たつた二里ぢやアありませんか、こゝから頂上迄見通されるのに案内者も絲瓜も要るもんですか、僕はどん〳〵駈けて登つて、戻りにも一息に駈けて降りたら、緩り噴火口を見たつて、暮れない内に歸つて來られやうと思ひます』と、相手の無氣力を嘲るの意を言葉に含ませる。

『わたしにやア、迚もそんな眞似は出來ません』、青黑い男は馬鹿々々しいと云つた風。

『そんなら、僕一人で行つて來ませう』自分は少しも萎けない。

『行て御出でなさい』と匙を投げたが、それだけで引込むと氣が利かないと思つたらしく

『淺間山ぢやアないけれども、噴火口へ一人は飲呑ですせ』と、青黑い男は苦笑ひを見せる。

『飛び込むのかも知れません、おい姐さん、明日の朝迄に歸らなかつたら、噴火口に僕の骨を拾ひに遣つて呉れ給へよ』と笑ひ飛ばして、黑紋附の羽織を引掛けさま、蝙蝠傘の胴中を鷲掴みに、委細構はずずん〳〵立出でる。

先程からの膳を捧げた態で

『お客さん眞誠に御一人で被赴るんですか』と呼び掛けながら下女が後を追ふ。

『眞誠も嘘もあるもんか、一人で行くんだよ』

『御履物は』

『下駄穿ぢやア、あんまり山を馬鹿にしたやうだから、草履にでもして行かうか』

『新しい草履は勿體なう御座いますから、わたくしの中古のいゝ草履を差上げませう』、これで、此下女が最前から燒く世話は、一通りの御世辭ばかりなのではなく、田舍流の親切氣から出たものと判つた。

裏門を出て振向くと、青黑い男の青黑い顏と、下女の赤黑い顏とが二つ並んで、覺束なげな目を自分に注いて居る、頻りに青黑い男と云ふと、何か、自分が生白い男でゞもあつて、それを鼻に掛けてゞも居るやうに聞こえるかも知らぬが、これは自分を問題外として、單に目に映じた通りを述べたのであつて、決してそん

な失敬な料簡から出たのではない、若し比較評をする段になつたら、青いと赤いとの差はあれ、それに加へられた黒さの度は、却つて自分の方が優つて居るかも測り難いのである。

自分は今、紺足袋に麻裏草履で、温泉場と谷川を隔てた裏手の山を、すた〳〵登り掛けて居る。

日は九月の十四日、時は午後一時幾分、處は下野の那須の火の山の中腹であるから、白河の關を越えて來る秋は先づ此所へ打附けて、楓、櫨等の葉に、早や三分の紅を帶ばしめて居るのである。

日本畫に描いた稲妻の線に似た路を登り切ると、茫々たる高原の緑に及物で傷を附けたやう、赤土の路が縱横限り無く拖かれて居る、今日は秋に入つてからの珍らしい快晴なので、高原の斜面の次第に高くなつて盡くる上に、砲臺の形した那須の噴火山、普

策に茶臼岳と呼ぶのが日に輝く白い煙を背負つて峙つ姿から、それと並ぶ朝日岳の劍を植えたやうに尖つて居る形迄、劃然と青空に象嵌されたやうになつて見えるのである。

自分は其斜面を踊るやうに登つて行く。

「やア、殺生石も褻の河原もずつと低い所に見える」と獨語したのは、自分と自分の歩みの早いに驚いた爲である。

路は幾筋にも分れて居るが、これは奥州白河路、これは那須九湯の中の旭温泉路、辨天温泉路、茶臼瀧温泉路と、一々石標が建つて居るから、迷ふ氣遣ひは少しも無い、自分は唯だ三斗小屋温泉の路を辿りさへすれば、自然に噴火口に行かれるので、此温泉は九湯の中一番奥に位置を占め、茶臼岳と朝日岳とを結び着ける瑪の背形の巖角を越えて、噴火口と擦れ〳〵の所を後へ降りるの

ある。

すん〳〵登ると、忽ち路を塞ぐ木戸がある。

『路を間違へた筈はないが、どうしてこんな所に木戸があるだらう』と、又もや獨語したが、中に粗末な建物があつて、人聲も聞こえるので、拳を固めてどん〳〵敲き始めた。

『此所は人を通さない所ですか』

『通します』

卷煙草に火を附けて、それを半分灰にした頃に、眞黑な山人がのそ〳〵と立出でゝ、無精らしく木戸を三分の一ばかり引開けた。

けれども隙間から突と潜り入る自分を見るや、山人は些と案外に思つた樣子である。

『結構な御天氣で御座えます、これから上は牧場で御座えますから、馬が下へ逃げて行かねえやうに、かうして木戸を締めて番をして居るで御座えます、御客樣が御通りになると直ぐ開いて御通し申すので、決して通れねえことア御座えません、へえ』と、打つて變つて恐縮するは、自分の言語態度都人士風で、此邊を獨歩きする者とちがつて見えるからであらう。

『さうか、邊卑な土地へ來ると、種々變つた事があるな』と、大に都人士になり濟ましたのみならず、眞實其變つて居るに興を催しつゝ、又も歩みを進めた。

色づき初めた濃木を疎に見て、あとは女郎花、撫子、野菊、龍膽、藤袴、それに兜菊の極めて色濃きをこき混ぜ、こゝ四千尺の高原は方に秋の錦を敷き渡して居るのである。之を自由の鄕として、栗毛蘆毛の駒の群が、鬣を振ひ尾を振ひ、那須岳が吐く煙の

如く亂れ遊ぶ光景は、實に雄大の畫である、實に高渾の詩である。

登り登ると、俄然として路が谷へ降り、下界には到底見ることの出來ない清い流水を圍んで、押し伏せられたやうに靜寂な林がある、而もそれは四分の色を呈して、溫泉場あたりよりは一段秋が深いのである。

再び登つて此谷を出ると、路が左右に分れて、右は大丸溫泉へ行くべく、左は自分の志す路である。

幾年かの前の大噴火に枯らされたのゝ骨と覺しい、眞白な枯木の蟲々立並んで居る下に、高さ纔に一二尺の尾花がひよろ〳〵と風に搖いで居る所へ來ると、もう空氣に硫黃の臭ひが雜るのである、見上ぐれば、茶臼岳額を壓して、赤黑い地肌鬼の如く、千萬條の絲と騰つて、十百反の布と靡く其呼氣、殷々として足の裏に

響く其呻吟、隨分物凄いものである。

牧場を過ぎてから、人ッ子一個に逢はない上に、此光景であるから、いさゝか心細くなり掛けたが、其雄大怪奇を喜ぶ本我が胸の底から躍り出して、自分を面白くてたまらなくならせ、疲れも渴きも忘れて、只管急ぎ登る。

劔を植え並べたやうな朝日岳に打突かりさうになつて、蕨萱の押潰したやうな建物がある、路は其庇の下に迫つて登るので、歩きながら中を見れば、煉瓦製の竈のやうなものが三つばかりと、山の如くに積み上げられた硫黃の塊とがあるばかりである。

其代り、傍に人の居さうな小屋が見える、自分はどんな者が住むかと覗く氣になつた。

覗いては見たが、入口だけが開いて、あとは塞がつた穴のやう

な小屋で、戸外は非常に明るいのであるから、何が何やら眞暗で判らない。

ちよろ〳〵と水音がするので、其方へ目を遣れば、此小屋と例の煉瓦の竈のある建物との間に、山から滲み出す水を竹の管で引いて、桶に滴らして居る所がある、岩の上に据ゑ付けた小さい流場も見える、大きな柄杓も見える、噴火の山から滲み出すのではなく、噴火の山の手前に一區域をなして居る低い林から滲み出すのである。

硫黄や他の礦物質を混じたのではなく、無論飲める水とは判つて居る、けれども、斷らずに飲むも不穩當であるし、且つは此水を媒ちに小屋の中の人間と語を交へ、暫く休まして貰つたら、噴火口探檢の心得になる話を聞くこともあらうと

『水を一盃飲まして下さい』と、叮嚀に申入れた。

『勝手に御喫んなさい』、眞暗な所から、太い無愛想な聲が響いて出る。

柄杓に口を附けて、ごくり〳〵腹に應へる程やる、飲んで見て始めて非常に渴いて居たことが判る、脊中を探れば、冷たい汗がびつしよりである。

『どうも有難う、大變いゝ水ですね』、と、試しに又話し掛ける。

『何地へ御出でなさるんです』、小屋の中の聲は少し打解けて來た。

占めたと、自分は入口に立塞がつて

『噴火口を見やうと思つて來たんですが、まだ餘程ありますか』

と、今度は較暗さに慣れた目を据ゑて、屹と奥を覗き込む。

朦朧たる所に、屈强の大漢子が一人、横向に胡坐を掻いて居る、

よく視ると、其前には圍爐裡があつて、梁から自在鍵を下げ、狸が化けたやうな茶釜を掛けてある、ずつと奥の、屋根裏が床に附く程に低くゝなつて居る所には、古葛籠やら夜の物やら、其外色々の物が見える。

『もう半里しかありません』と、ばつたり下へ置いた物は、身體に隔てられて見えないけれども、厚い洋綴の書籍らしい。

但し、今置いた物は見えないが、置いたあたりに立てゝある光る物に目が引かれた、それは新式の使ひ好さゝうな獵銃である。

見えないけれども、書籍も小説本や講談本ではないらしいと思はれる。

『何か製造でもなさるんですか』、煉瓦の竈に就いて、對話の緒を引出さうとするのである。

『えゝ、噴火口から採つて來た硫黄を精製するのです』、此邊の山人らしくない物云ひである。

これで此男の此所に居る所以が判つた、噴火口の下、五六千尺の高地に膝を容れるばかりの小屋を構へ、硫黄を蒸して獨り住むとは、何たる世に強ぬた生活であらう。

自分はそゞろに此男の素性が床しくなつたが、入れとも云はれないのに自分から押して入る譯にも行かず、暫く躊躇した後に

『噴火口の樣子は一人で行つても判るでせうか』と訊ねた。

『案内を知つて居なければ、精しくは判りませんねえ』、聞きやうに依つては、冷笑ふのかと思はれるやうな口調である、それにも僻易せずに

『失敬ですが、案内をして下さいませんか、御禮は致しますから』

と切り込めば
『礙なんか要りませんですけど、硫黄を採りながら、御一緒に行ってもようがす』と、思つたより無雜作に打割れて來る。
早速なもんで、立上つたと思つたら、早や草履を突掛けて出て來るのである。
『やア』、自分は思はず聲を擧げた。
『やア』、小屋の男も同じく驚きの聲を合せる。
『君は、赤石徹君ぢやアないか』
『君は伊藤銀二君！』
『奇遇だねえ』
『むゝ、これア奇遇だ』
『今頃は支那で活動してる筈の君が、どうしてこんな所に強ねた

生活をしてるんだ』
『まア入り給へ、噴火口は後にしやう
赤石は一旦出て來て又引込んだ、紺絣の箇袖の綿入に綿ネルの襯衣を着て、木綿紋の兵子帶を締めて居るが、其長大の身、奇俊の相は、一層特色を加へて、那須の火の山から生れた怪物かと思はれるばかりである。
『さア、入り給へ、これが赤石徹の城廓だ』と晒ふ聲、物凄く小屋の中に響き渡る。
草履を脱いで上り込むと、足に障るものは、藁で織つた荒筵である。
『待ち給へ、敷物を遣らう』
『何かは知らず、薄汚い獸の皮が圍爐裡の岸に展べられたので、

遠慮をせずに其上に胡坐を掻く。

『山は寒いから、焚火が最上の御馳走だ』と云ひさま、枯枝をしたゝかへシ折り燃べるに、一叢咽せ返るばかりに濃き煙が立つ。

『ぷッ、これァ堪らない、僕は寒くないから、そんなに火を燃して呉れなくつてもいゝよ』

『暫く我慢し給へ、火が燃え上ると煙が逃げ出すんだ、君は山を登つて來たから汗も出たらうけど、坐つてゝ見給へ、直に背中から寒くなつて來るから』

赤石は委細構はず、火吹竹を取つて息を込める、ぽうッと空氣に焔の觸れる音がして、小屋の中が明るくなると、膝近く伏せられてある書籍が光り出した、革表裝に金文字の洋書である。

『何だえ、それは』

『英文の舊約聖書さ』

『ふむ、君は基督教徒か』

『何故』

『聖書を讀んでるからさ』

『いや、僕は基督教徒ぢやアないけど、舊約聖書だけを愛讀するんだ、舊約聖書は馬鹿らしい所に面白味がある、別けても、こんな所に一人住んで居て讀むに適する』と云ひ掛けて、赤石は得意然たる微笑を含み

『實際、僕の生活其物が舊約的なんだからね』と調子を變へた。

『何故』、今度は自分が輕い疑問の態度になる。

『大袈裟に云へば、こゝは火の山の煙の中だ、火の山の煙の中に唯だ一人住んで、皮膚も髮髯も硫黄の氣に染めてるなんて、何と

無く舊約的ちやァないか、時々噴火口の上に峙つ岩石を攀ぢて、濃々たる白煙の中に突立ち、天に向つて話をすることもあるんだせ、面白いだらう』と、其縮れて黄ばんだ髯の一部分を拈る。

『成程、さう云はれて見れァ、君の容貌から毛の色迄、以前と少し變つたやうだね』、自分の眼は焚火に映つて、好奇心に燃え立つのである。

『豈獨り外觀のみならんやだ、骨も固くなつたし、膽ッ玉も太くなつたよ』と、赤石は一人で威張つて得意がる。

『君は幾歳だつけ』

『今年四十、やつと青年になつた、僕は百歳を標準として自分の一生を割振つてるから、四十歳を以て青年の域とする、君は』

『三十七』

『これァ頼もしい、僕より更に少年だ、お互に、これから大に遣るべしだね』

こんな、生活でも、感心に茶器の用意が整つて居て、香ばしい玉露を淪れて出す。

『麥酒もあるけど、噴火口へ持つて行つて扳かう』

『有難う』と茶碗を受けて啜り

『君は何故此山へ籠つてるんだ、何か大に憤る所でもあるのか』

と改まつて問ひ掛けた。

赤石は笑つて答へない。

『此仕事は君が始めたのか』と自分は訊ね方を改めた。

『いや、これァずつと前からの仕事だ、給金で雇はれて、こゝに居る者があつたのを、雇主と其者と双方へ交渉して、僕が此所に

居る間は、僕から其者へ給金を拂つて、家に遊ばして置き、時々手傳ひや使ひに來させるだけにしてる、そして僕は無給金でこゝに一人住み、氣儘に働いてるんだ』

『醉興な人間もあつたもんだね』、自分は唯だ呆れるばかりである。

『醉興な君からも醉興と見えるか、けれども、僕の斯うして此所に居るのは、非常に有意味な事なんだぜ』

『どうして』

問はれて赤石は昂然となつた。

『僕は支那で失敗して歸つて來て以來、深く感ずる所があつて、噴火山と同化する爲に此所に居るんだ、僕の地肌を噴火山の地肌のやうに黑く固くし、僕の骨相を噴火山の骨相のやうに秀でゝ稜立たせ、さうして、時あつて僕も亦大に噴火すべく、火氣を底に

蓄へる事噴火山の如くにならうと思ふ、其爲噴火山と親むの生活をしてるんだ、今日の僕には、親も無く、兄弟も無く、友人も無く、敎へを受くべき師も無く、讀むべき書も無い、噴火山が親だ噴火山が兄弟だ、噴火山が友人だ、噴火山が師だ、噴火山が書だ、舊約聖書だつて、何も舊約聖書として讀むんぢやアない、舊約聖書を通して噴火山を讀むんだ、今日の僕の眼中には、噴火山の外に何も無いッ、段々聲が高まつて、果は小屋も搖ぐやうになる。

『それで、結局はどうするんだ、何時迄も此山に斯うしてる譯ぢやアあるまい』、自分は調子に乘つて煙に捲かれずに、沈着いて要領を得やうと構へる。

『むゝ、其所だ、此那須の噴火山は現在甚だ振つて居ない、凄いと思へば凄くも見えるだらうが、岩の隙間から硫黃臭い蒸氣を噴

き出すに過ぎないので、要するに今は居睡時代であるんだ、けれども、居睡りは早晩覺める時がある、昔時此山が非常の大噴火をしたことは、舊記を案ずる迄も無く、これから登つて峰の壞れた痕を見れば判る、殺生石など云ふものも、噴き出された岩の缺片に外ならないんだ、だから、今後更に昔時に優る大噴火を始めて山の高さの十倍もある火柱を立て、那須野の果迄も熔岩を流し出して、周圍に青い物と動く物との痕を絶つやうにならないとも限らない、僕も亦其通りで、今は此山を枕に居睡りをしてるが、一旦覺めて起つたら、即ち自分の身を打壞しての大噴火だ』と、那須の噴煙も屑ならぬ大氣焰。

『それで、大概何時頃山を出る豫定かえ』

『五月も居たから、いゝ加減に噴火山と同化したやうだ、これから寒くもなるし、今月一ぱいも居たら、そろ〳〵人間界へ降りやうと思つてる』

『降りてどうする』

『先づ東京へ出て、それから朝鮮へ行き、最後に支那へ入る積りだ』

『それァ面白い、僕も朝鮮から滿洲へ行つて見たいと思つてる』

『むゝさうだ、君の其後の事も聞かなけれァならない』、赤石は氣を變へて、眼に好奇心を凝らす。

『兎に角噴火口へ案内して呉れ給へ、僕の經歷は歩きながら話さう』

此所で時を移しては、歸りが遲くなつて、宿に心配をさせなければならぬと思ひ、自分は懐中時計を出して見ながら立上つた、

もう三時である。

年を經ながら十分に育たぬ拈くれた木立の間を、岩角踏み渡つて二人は登るのである、空氣の幾分か薄くなつて居るのに、硫黄の臭ひが多少混じて來るので、やゝ呼吸の苦しさを覺える。

『君は那須の溫泉へ來てるんだね』、先に進んだ赤石が、歩きながら中音で訊ねる。

『むゝ、小松屋に居る』、息が彈んで居るので、自分の聲はどうしても高くならざるを得ない。

『同伴が無いのか』

『一人さ』

『溫泉ももう盛り時が過ぎたらう、先達迄は、噴火口探檢に來る者が、二日に一組ぐらゐはあつたんだけど、此十日ばかりは些も

來やアしない、見給へ、葉が紅くなつた、山の秋は早いねえ』

『むゝ、自分は胸を撫でゝ、唸り聲を返事に代へるばかりである。

『それでも、君は流石に變つてる、今迄は、五人七人の組に案内者が附いて來るのばかしで、たつた一人の案内若も附かずの噴火口探檢者は、君が始めてさ、それに午後からの御出掛けだ』

『だから、宿でも心配をして、若しや淺間山の流ぢやアあるまいかと怪む樣子であつた』

『はゝゝ、それア大丈夫だ、淺間山のやうな、眞逆樣に飛び込まれる噴火口は、此方にやア御生憎樣なんだから』

『さうだつてねえ』

『古い噴火の跡は、朝日岳の骨を殘して、恐ろしい赤剝けの谷を

拵へてるが、今あるのは、岩の隙間から、汽車見たいにぶう〳〵湯氣を吹いてるだけなんだ、何でもずつと昔には、茶臼岳と朝日岳の間に、今より一際高い那須の頂上があつたのを、大噴火の爲にそいつが引ツこ抜かれて、粉塵になつて飛び散つたんだらうと思はれる、殺生石なんかも、其缺片の一つにちがひない、もう少し登つて見れア、全體の形勢が判るよ』

自分が喘ぎ〳〵切れ〳〵の物云ひをするのに、赤石は一向平氣なもので、小屋の圍爐裡の前に胡坐を掻きながら話すと少しも變らない息使ひである、それに、背高く足の長い故もあるであらうが、綏々と登りながらの赤石が進行の早いこと、驅けるやうに急いでも自分は後れ勝になるのである。

軈て、木立疎らに隙き渡ると、削り滅らしたやうな朝日岳と、

積み重ねたやうな茶臼岳とが、左右に別れて其赤黑く物凄い全體を現はした、漠々と虛空を震動する響、漂々と峰頭を呑吐する煙すべて手に取るやうに近い。

『やア、今でも却々壯觀だぞ、汽車が湯氣を吹くのになど比べるのは可哀相だ』と、自分は其物凄さに打たれて感歎の聲を放つ。

茶臼岳と朝日岳とが蝶がつて居る間迄登ると、少しの間であるが、路が俄に樂になる、振向いて見れば、赤石の小屋と硫黃精製場とを含む木立を、やゝ楕圓形に青く殘して、其上も下も右も左も皆白く雪を留た枯木ばかりである。

『こゝで暫く、休して呉れ』、云ふより早く、自分は石に腰を下した

『君は弱いなア』と、赤石も餘儀無く立停まる、手には、麥酒壜

の先が見える籃を提げて居る。

『君が馬鹿に強いんだ、君の強みは、人間よりも動物に近い』、息を切り〳〵口惜しがつて云ふ。

『相變らず剛情だね、尤も公平に云つたら、君が弱いんでも僕が強いんでもなくつて、空氣の薄い高山に慣れてるから、僕が君より弱らないんだらう、それよりは、路の平な所で、君の其後の事を話して貰はうぢやァないか。

『むゝ、僕の其後の事も、要するに唯だ數言にして盡くすべき問題だ、何の仕出來した事も無いんだからね』と、自分は石から腰を離した。

『僕が先刻、自分の經歷を語るに臨んで、數言にして盡くすべき問題だと云つた事を、記憶して居て、際どい所にそれを應用する

なんて、君は却々新聞記者的手腕がある』

『其新聞記者にもなつて見た』

『えッ、新聞記者にもなつた、ちやァ、臺灣の樟腦製造事業は駄目になつたのか』、今度は赤石が却つて石に腰を下しさうな構へになる。

『そんな事は疾の昔に駄目になつたんだ、だから、君と臺灣で別れて後の僕の經歷も、數言にして盡し得べく詰らないものなんだ、君は支那へ行く、僕は內地へ資金調達に歸つたが、妙な事から滅茶々々になつて、半分出來た金は湯水のやうに使ひ果す、臺灣で頸を長くして待つて居る莊田八五郎とは、詫手紙一本で縁を切る、さうして居る中に金が無なる、無錢旅行に出る、困つた揚句には、宇都宮で土方の手傳ひをやる、足尾へ坑夫に入る、福島で又土方

の仲間へ入る、福島縣と山形縣との境の山中で雪中に倒れたが、不思議な事で生命を拾ふ、それから、故郷の秋田のほとりに暫く蟄して居たが、試めしに出した手紙が功を奏して、東京の新聞社に呼ばれ、新聞記者と云ふものになつた、けれども、今は其新聞記者も止して文士生活、即ち著述をして、今日を送つて居る、これが君と別れてから十數年の間の僕の略歴だが、此新聞記者や文士と云ふ者も、僕の性に合はない、もういゝ加減に足を濯つて朝鮮へでも飛んでかうと思ふ」

自分が息をも繼かずに經歴の概要を述べるを、じろ〳〵顔を見つゝ聞いて居た赤石は、言語の了るを待つて失望の苦笑ひを浮べた。

『僕も其後妙な運命になつて、君等に音信もしなかつたが、多少

の成功はしただらうと思つて、これから實は、臺灣へ問ひ合せやうと思つて居たんだ、けれども那須郡は僕の故郷で、支那から歸つて間も無く山に籠つたんだからね、君等を頼みにして、次第に依つたら金を出して貰はうと思つてたら、それぢやアおや〳〵だね、君も隨分氣の變り易い男だ』と云ふ。

壁なら八枚か十枚敷かる程の面積が、剜られたやうに穴になつて、濃き灰色の蒸氣を一ぱいに吹き出して居る、路は茶臼岳と朝日岳との間の馬の脊形の部分を登り盡くして、西北に向つた今迄と反對の方面に移つたので、身を切るやうな冷い風が、九月中旬とは云はせずに打着けて來る、見る〳〵身體の露はれて居る所が黒ずんだ紫色になる。

蒸氣を吹き出す穴に風が吹き込む、暖い蒸氣と冷い風とが衝突

して、怪獣の吼えるやうな聲をなす。

『これが那須の噴火口か、これなら大きくはないけれども、人間ぐらゐ幾等も飛び込んで死なれさうぢやアないか』と、自分は危い縁に立つて覗く。

『それア、無理に死ぬ氣になつたら、死ねないこともあるまいが、底は淺いんだせ、其日に依つて蒸氣を吹き出すことが少ないと、降りて見られもするんだ、但し底から更に横へ深い穴があつて、蒸氣を出して寄越すんだが、それの深さは判らない』、赤石の説明は、那須の山を蔑すやうでもあり、亦輝かすやうでもある。

『那須の山で、見るべき所はこれだけか』

『だから、君が一人で來たつて、十分に見る所が見られないッて云ふんだ、一人なら、此所迄來て畏がつて引返すだらう、こゝは

三斗小屋へ行く路のほとりに過ぎないんだせ』

『ぢやア、此煙の中を登るのか』

『上の方に、汽車見たいにぶう〳〵云つてる所があるだらう』

『又汽車ッて云ふ、汽車なら、十も二十も集めて一度に湯氣を吐かせるやうな音だ、彼所迄登るのかえ』、自分は興を催して訊ねる。

『さうさ、あれは新吹つて云ふから、あんまり古くない時代に吹き始めたもんだらう、此方の穴は、古吹とか古穴とか云ふんださうだ、見給へ、新吹の勢ひをさ、あの新吹は、少さいけれども注意すべきものだせ、既にあの新吹ある以上、今にも、あれに千倍萬倍する大新吹が出來るかも知れないぢやアないか、僕に附いて來給へ』

古穴の蒸氣風に靡いて横に流れ、激しい硫黄の臭ひが少し薄ら

ぐと、赤黒く莽じい岩が幾十丈と無く彌が上に重なつて頭の上に崩れて來さうな危い位置に、赤石が所謂汽車の湯氣を吐くやうな音を帶びつゝ、非常に多量の白煙を吹き出して居る隙間が、數個所に並んで見えるのである。

赤石は委細構はず、濛々の中を半ば手捜りに、纔に岩角を便りとし、屏風立ちに切立つた所を登つて行くので、自分も負けじと後に附く。

『これは、石吹つて云ふんだ、見給へ』と云ひさま、蒸氣と共に硫黄を吹出して周圍に黄を盛つて居る穴を狙ひ、手頃の石を投げ込むと、忽ち八方に硫黄の粉末を散らして、少しの猶豫も無くそれを吹出す。

さうかと思へば、一二尺高く、玉を跳らして湯を吹いて居る所

もある。

登り登ると、賽の河原とでも名附けたら相應しいやうな礫の原がある、上には更に尖つた大岩が並んで、硫黄の氣まぢりの白煙立迷つて居るが、此所だけ少し平で、一息繼がれるのである。

人程の長で、俵を立てたやうな形の石がある、面が凹んで、何時の雨の名殘か、數合の水が之に溜つて居るが、澄み切つて及よりも白くきらめく、試めしに指を觸れて見ると、氷よりも冷たい、嗚呼、噴火口の上に立つ石にも、こんな冷たい水を貯へる餘地があるのである、自分は我知らず慄として、胸の底の琴の絃に何物かの觸るゝを覺えた。

『君、僕は歌と云ふものを作つたことが無いから、法に叶ふかどうか知らないが、偶然一首浮んだよ』

『どう云ふんだ』
『火の山の火を噴く口の上に立つ凹める岩に氷らんとす水、斯う云ふんだ』
『むゝ、面白い、それこそ眞誠の歌と云ふもんだ、法に叶はうが叶ふまいが構はない』と、赤石は興の高まつた聲を擧げ、高らかに其歌を朗詠したが
『好し、此石の傍で開かう』と籃を置き、やをら罎の首を掴んで栓抜を突込み、麥酒の口を抜いた。
赤石が侑める洋盃を擧げて、自分は慨然と胸を拍ち、沈痛悲壯の聲を振搾た。
『嗚呼、男兒亦此石の凹みに湛えた水とならなければならない、苟くも冷ならんとせば、火の山の火を噴く口の上に立つても、毅

然として氷に敵するの冷たさを失なはないやうでなければならない、敢て其冷たさを擧びたい譯ではないが、冷熱一揆、唯だ何所迄も其操守する所を失はないのが健いと思ふ、今更ながら、先刻の君が一言僕の肺肝を貫いた、實に、心の定まらないのが僕の病ひで、其爲め、大事業を成して野心を滿足させ樣と掛つたかと思へば、何時しか又文筆を生命として他を顧みないと云ふ風に變る、其の爲め、事業の人としても文筆の人としても、共に中ぶらりんで全力が注がれず、虻蜂取らずに空しく半生を過ごして、顧みれば、屈のやうな虛名の外に何の得る所がなく、一生を未成品で終りさうな運命に傾いて居る、君と臺灣で別れて以來の非を、今にして深く〳〵悟つた、僕も今から猛省して、二途掛けずに一を守るの人となり得べく、努力して其時期を來らしめやう』。（了）

明治四十四年九月二十日印刷
明治四十四年九月廿三日發行

著作權所有

著者　伊藤銀月
東京市神田區小川町四十一番地

發行者　伊上純藏
東京市神田區中猿樂町四番地

印刷者　佐々木俊一
東京市神田區中猿樂町四番地

印刷所　秀光舍
東京市神田區小川町四十一番地

發兌元　文帥堂
東京市神田區裏神保町一番地

發賣元　上田屋
電話本局三八二八番
振替東京三〇八六番

予價附
定價五十錢

112

338
46

338
46

095678-000-1

338-46

予

伊藤　銀月／著

M44

DBQ-3382